米原町埋蔵文化財調査報告Ⅶ

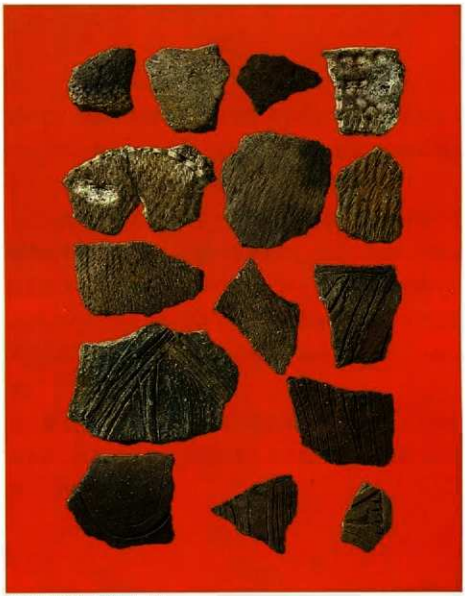
ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

1987・3

米原町教育委員会

中多良薗華寺遺跡下層出土遺物

中多良薗華寺遺跡上層出土遺物



筑摩仰遺跡出土縄文式土器

序

米原町内では、昭和57年度より、ほ場整備事業が実施されております。その事業件数は年々増加しており、工区内における埋蔵文化財の調査・保護に心配がもたれておりました。

幸いにもほ場整備事業実施当初より、滋賀県教育委員会の適切な指導を受け、発掘調査を円滑に実施してまいりました。今回の調査は県営ほ場整備事業ではありましたが、町教育委員会が主体となり調査を実施いたしました。ここにその調査成果を報告書として刊行することとなりました。この報告書が米原町の埋蔵文化財に対する理解を深めていただく一助になれば幸いです。

最後になりましたが今回のほ場整備に伴う発掘調査に、あたたかいご理解をいただきました地元中多良の関係者および関係諸機関に対しまして、厚くお礼申し上げます。

昭和62年３月

米原町教育委員会

教育長　福 田 定 観

例　　言

1．本書は米原町内における昭和61年度県営ほ場整備事業（天の川西部南地区中多良工区）に伴う埋蔵文化財調査の報告書である。

2．ほ場整備事業工区内には、下定使遺跡・南華寺遺跡・立花遺跡が所在しているが、本書では一括して収録した。

3．発掘調査は昭和61年６月25日より７月18日までおこない、以後62年３月20日まで遺物整理・報告書作成をおこなった。

4．調査は滋賀県の依頼により、米原町教育委員会が実施した。

5．調査は下記の体制でおこなった。

調査主体	米原町教育委員会		教育長	福田定観
調査事務局	〃	社会教育課	課長	後藤法泉
	〃	〃	課長補佐	相宗又兵衛
	〃	〃	主任	清水寛章
	〃	〃	主任	中嶌正寿
	〃	〃	主任	藤原幸子
	〃	〃	主事	池田　仁
調査担当者	〃	〃	技師	中井　均

調査補助員　中川和哉、細川英雄、井関　敏、岩根達雄、宮川哲郎、澤　嘉樹、草弭祥貴、多田暢久

調査作業員　成宮龍夫、成宮節子、角田登志子

6．遺物の復元、実測、トレースに関しては、調査担当者および調査補助員の共同作業である。

7．調査に関しては、滋賀県教育委員会文化財保護課葛野泰樹氏の指導を得た。

8．遺物の写真撮影については、寿福滋氏を煩わした。

9．本書の執筆、編集は中井均がおこなった。

目　次

巻頭図版

序　文

例　言

第Ⅰ章　調査に至る経過…… 1

第Ⅱ章　位置と環境

第1節　位　　置…… 1

第2節　歴史的環境…… 1

第Ⅲ章　調査の結果

第1節　調査の方法とその結果…… 3

第2節　出土遺物…… 3

(1)　下層出土の遺物…… 6

(2)　上層出土の遺物…… 11

第Ⅳ章　調査のまとめ…… 20

第Ⅴ章　付載

～筑摩佃遺跡発見の遺物について～…… 21

挿図目次

第１図　調査地周辺図……2
第２図　トレンチ配置図……4
第３図　第７トレンチ上層遺物出土状況および断面土層図……5
第４図　第５トレンチ南壁断面土層図……6
第５図　下層出土遺物(土師器)実測図……8
第６図　下層出土遺物(土師器)実測図……9
第７図　下層出土遺物(土師器)実測図……10
第８図　下層出土遺物(須恵器)実測図……11
第９図　上層出土遺物(土師器)実測図……13
第10図　上層出土遺物(須恵器)実測図……14
第11図　上層出土遺物(須恵器)実測図……15
第12図　上層出土遺物(須恵器)実測図……16
第13図　上層出土遺物(須恵器)実測図……17
第14図　上層出土遺物(灰釉・土錘・瓦・石器)……18
第15図　上層出土遺物(木製品)実測図……19
第16図　調査参加者スナップ……20
第17図　筑摩佃遺跡遺物採集地点位置図……21
第18図　筑摩佃遺跡採集遺物実測図……23
第19図　坂田郡南西部地区の縄文式土器出土遺跡位置図……25

表 目 次

第１表　坂田郡南西部地区の縄文式土器出土遺跡一覧表……26

図版目次

図　版 1　遺跡　(1)調査作業風景
(2)第４トレンチ全景

図　版 2　遺跡　(1)第４トレンチ土層断面
(2)第６トレンチ下層遺物出土状態

図　版 3　遺跡　(1)第７トレンチ上層遺物出土状態
(2)第７トレンチ上層遺物出土状態

図　版 4　遺跡　(1)第７トレンチ上層獣骨出土状態
(2)第６トレンチ上層木器出土状態

図　版 5　遺物　(1)下層出土土師器
(2)下層出土土師器

図　版 6　遺物　(1)下層出土土師器
(2)下層出土土師器

図　版 7　遺物　(1)下層出土土師器
(2)下層出土土師器
(3)下層出土土師器

図　版 8　遺物　下層出土土師器・須恵器

図　版 9　遺物　上層出土土師器・須恵器

図　版 10　遺物　上層出土須恵器

図　版 11　遺物　上層出土須恵器

図　版 12　遺物　上層出土須恵器

図　版 13　遺物　上層出土須恵器

図　版 14　遺物　上層出土須恵器

図　版 15　遺物　(1)瓦・灰釉・土錘
(2)砥石

図　版 16　遺物　(1)曲物
(2)木皿

図　版 17　(1)筑摩社並七ヶ寺之絵図(筑摩神社蔵)
(2)同上拡大部分(中多良薗華寺付近)

図　版 18　付載　筑摩佃遺跡　(1)遺跡近景
(2)縄文式土器散布状況

図　版 19　付載　筑摩佃遺跡　(1)縄文式土器散布状況
(2)出土遺物

第Ⅰ章　調査に至る経過

滋賀県坂田郡米原町中多良には、周知の遺跡として集落の西側に立花遺跡、薗華寺遺跡、下定使遺跡が所在している。今般県営ほ場整備事業（天の川西部南地区中多良工区）が計画され、３遺跡がその工区内に含まれていたため、事前に発掘調査をおこなうこととなった。現地発掘調査は昭和61年６月25日より７月18日までおこなった。

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　位　置

今回の調査地は滋賀県坂田郡米原町中多良小字下定使、下柳、上柳、上石田、笛吹、池、珠数座、細田、下円ヶ寺、立花、駒田に所在している。これらの小字は中多良集落の西方に位置しており、地目は全て水田であった。現在の標高は85.9m～86.4m付近であり、ほとんど起伏のない平坦地であった。

調査地の北方600mの地点には山東町柏原に水源をもつ天野川が流れている。この天野川は現在近江町世継に至り琵琶湖に流れ出ているが、その旧河道は上多良、中多良、下多良の各集落の東側を南下して入江内湖に流入しており、現在の集落はその自然堤防上に位置していると考えられる。

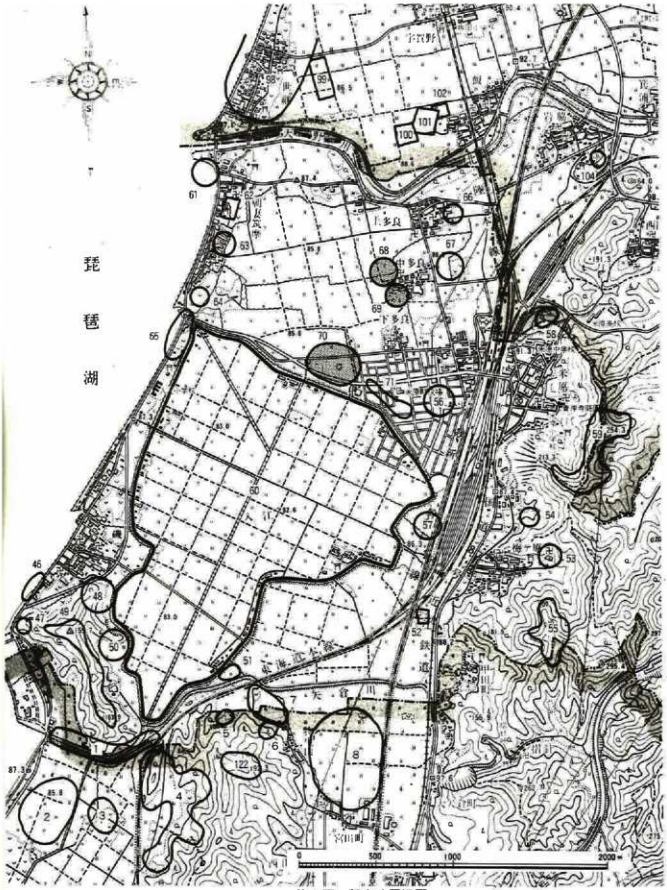
第２節　歴史的環境

今回の調査地には、北側より立花遺跡、薗華寺遺跡、下定使遺跡が周知の遺跡として位置している。『改訂坂田郡志』によると、立花遺跡からは弥生式土器片が、下定使遺跡からは須恵質の土錘がそれぞれ出土している。また中多良集落内からは地下５尺より短径６寸３分、厚さ１寸２分の石皿が出土している。薗華寺遺跡は嘉吉元年（1441）に作成された、『典福寺官務牒疏』に、

「薗華寺　在多良、僧房六宇、本尊弥勒大士、伊吹山三朱上人開基」

とあり、近江町字賀野に所在した歓喜光寺の別院であった寺院跡と考えられる。

さらに下定使遺跡の南側には中多良入江内湖周辺遺跡があり、和同開珎、萬年通宝が出土している。この遺跡より南方に旧入江内湖が広がっているが、この内湖自体も全域より縄文早期より平安時代末期の遺物が採集されている。この内湖遺跡は近年数ヶ所において発掘調査を実施してきたが、遺物包含層は良好なものの、明確な遺構は検出できなかった。これは内湖遺跡が集落より投棄された遺物の堆積地であり、集落はこの内湖の北方にあるのではないかと考えられる。今回の調査地は地表面で遺物が採集されており、内湖北方の集落跡ではないかと期待された。



第1図　調査地周辺図

1.矢倉川遺跡　2.松原内湖網代口遺跡　3.松原内湖小屋遺跡　4.松原内湖遺跡　5.梅塚遺跡　6.物生山西遺跡
7.物生山遺跡　8.苗田遺跡　46.磯湖岸遺跡　47.磯崎古墳群　48.磯山城遺跡　49.磯山城跡　50.堂谷遺跡
51.入江内湖西野遺跡　52.楯鳥城跡　53.霊水寺遺跡　54.善後寺遺跡　55.昌蔵城跡　56.米原駅前遺跡
57.米原駅西遺跡　58.岩谷遺跡　59.大尾山城跡　60.入江内湖遺跡　61.朝妻港跡　62.朝妻城跡
63.法善寺遺跡　64.今江寺遺跡　65.筑摩湖岸遺跡　66.本願寺遺跡　67.中多良遺跡　68.立花遺跡
69.薬師寺遺跡　70.下定使遺跡　71.入江内湖周辺遺跡　98.世継遺跡　99.佳願寺遺跡　100.蓮明庵遺跡
101.正恩寺遺跡　102.地蔵堂遺跡　104.観音寺遺跡　122.物生山城跡
(遺跡番号は滋賀県教育委員会発行『昭和60年度滋賀県遺跡地図』と一致する。)

第Ⅲ章　調査の結果

第１節　調査の方法とその結果

調査はほ場整備工区内に、切り下げ計画部分がなかったため、排水路部分のみにかぎられた調査となった。このためトレンチは幅４ｍとし、遺構・遺物の確認をおこなった。その結果に基づいて必要個所については拡張していくこととした。

トレンチの設定は、計28ヶ所におよんだ。このうち、遺構・遺物包含層の認められたのは、3~7トレンチのみであった。これら以外のトレンチでは北端・南端の17～21および22～28の各トレンチでは、0.5mの耕土・床土を除去すると、礫層となり、天野川の氾濫源であったと考えられる。また8~16トレンチは厚さ0.6～0.7mの耕土、床土の下に厚さ0.4～0.6mの砂質粘土がひろがり、さらに下層には0.7～1.5mの厚さの粘土層がひろがり、最下層（地表面下1.7～2.8m）は砂層であった。この間遺物はまったく認められなかった。

3～7トレンチ

３トレンチの北端部から４～７トレンチでは厚さ0.7mの耕土、床土を除去すると、標高85.0m付近より厚さ0.7mの暗灰色粘土が堆積している。7トレンチではこの上面で８世紀後半を中心とした遺物の堆積が顕著に認められた。３～６トレンチでも量は少ないが、ほぼ同時代の遺物がこの暗灰色粘土層中に認められた。

さらにこの暗灰色粘土層下に青灰色粘土層が厚さ0.3mにわたり堆積しており、その下に黒褐色粘土層が厚さ0.3～0.4m堆積している。この黒褐色粘土層中は古墳時代の遺物包含層であり、標高84.0～84.5m付近となる。なおこの包含層の広がりは３トレンチ北端と４～６トレンチ全域におよぶが、７トレンチでは認められなかった。このため、この包含層は流路あるいは沼状の埋土と考えられ、その広がりは調査地より西北部へ広がるのではないかと推察される。

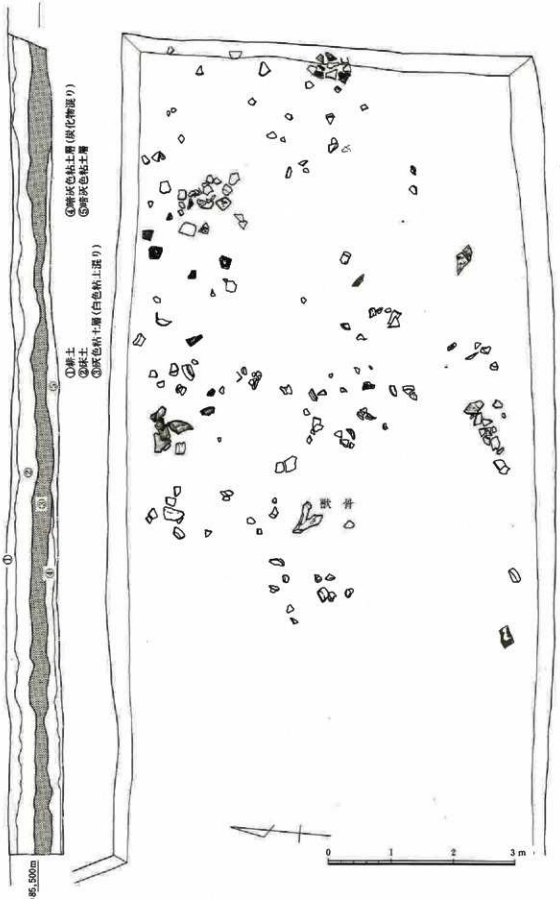
このように３～７トレンチでは上下２層にわたり遺物包含層が認められたが、残念ながら遺構の検出はできなかった。

第２節　出土遺物

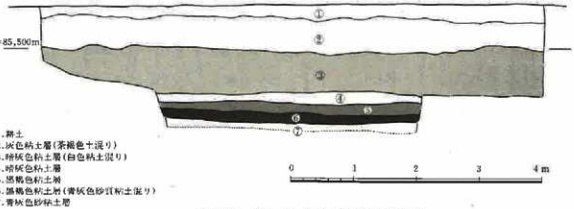
今回の調査では前述したように３～７トレンチで遺物が出土したが、すべて包含層よりの出土であったため、ここでは一括して報告することとする。ただし出土層位は上・下２層にわたることより、層位だけは区分して報告したい。

中多良
観音寺
下多良
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
0
100
200 m

第２図　トレンチ配置図



第３図　第７トレンチ上層遺物出土状況および断面土層図



第４図　第５トレンチ南壁断面土層図

(1)下層出土の遺物

土器類

下層出土の土器類には土師器壺、甕、高坏と須恵器坏、坏蓋、高坏、甕があった。

ⓐ土師器

甕（第５図、第6図）

(1)～(4)はいわゆる近江型の「受口状口縁」となるものであるが、口縁部外面に施文は認められない。つまみあげられた口縁端部は平坦となる。(5)は口縁内面が受け口状にやや屈曲を有する。体部外面は全面に縦位の櫛描沈線が強く施されている。(6)～(24)は、大きく「く」の字に屈曲する口縁を有する甕で口縁端部が肥厚して内傾する段をなし、体部は球形を呈すると考えられる。外面は口縁より肩部まで横ナデを施し、体部はハケ調整とする。内面は口縁部のみナデを施し、体部以下はヘラ削りをおこなっている。胎土は精選されている。これらの諸特徴より布留式土器の中でも後出のタイプであろうと考えられよう。ただし、(6)は口縁端部肥厚せず、平坦な面として端部をおさめ、内面も口縁下部にハケ目を残している。また(22)は体部外面にハケ目が顕著に残り、内面も口縁部にはハケ目を残している。(25)～(26)は小型の甕で、長胴を示す体部が続くと考えられる。(25)は肩部以下全面に縦位のハケ目を施している。(27)は、ゆるやかに外反する口縁を有する甕で、端部はつまみ出されて、斜に平坦部を有している。器形は球体状をなすが、最大径は体部中心よりやや下方になる。外面は口縁端部より最大径のところまではナデており、最大径部分より下部はハケ目を施す。底部付近はまたナデとなる。内面は口縁部と体部の接合痕を明瞭に残し、底部付近までナデとなる。ただし、最大径にあたる部分には、横位のハケ目を残す。底部付近はハケ目を施している。胎土は非常に精選されており、雲母を多量に含んでいる。焼成も堅緻である。なお体部に６ヶ所にわたり穿孔を有している。(28)は胎土中に２～５㎜大の石粒を多量に含まれているが焼成は堅緻である。器壁も他の甕に比べて厚く８㎜を測る。(29)は台付甕の台部と考えられる。(30)～(31)は無頸の甕ではないかと想定したもので、平坦な口縁端部からすぐに体部に至る。外面は全面にハケ目を施す。内面は口縁部のみ削りをおこない、体部はナデとなる。いずれも胎土は粗く、器壁も厚い。

壺（第７図32～40）

(32)は頸部より直に立ちあがる口縁を持ち、端部内面は肥厚している。調整技法は(6)～(24)と同様である。(33)は外弯しながら広がる口縁部を有し、その端部は丸くおさめている。胎土は粗く、内面は体部以下輪ずみの痕跡が明瞭に残るように未調整である。(34)は二重口縁を持つ壺で、口縁部は二段に外反するが、何ら装飾はもたない。(35)も二重口縁を持つ壺で、「く」の字に屈曲した口縁に受け部状とした部分からさらに上方へ直に伸びる口縁を持ち、端部は平坦面を有する。厚手の土器である。(36)は二重口縁壺の二段にわたり外反する口縁部分と考えられ、現存部分以下に直に立ちあがる口縁部が続くものと考えられる。二段目立ちあがり部分に竹管による円形浮文を付す。外面縦位のヘラ磨きが認められる。(37)は小形の丸底壺で、精良な胎土で器壁は非常に薄い。内外面ともにていねいに横ナデを施し、口縁内面のみに縦位のヘラ書暗文を施す。体部に穿孔が認められる。(38)～(40)は壺の底部である。(38)には穿孔が施されている。

蓋（第７図41）

(41)は蓋形土器である。つまみ部分は、横へ張らずに外反しながら端部に伸びている。凹部は深い。

高坏（第７図42～51）

(42)～(51)は高坏で、(42)～(45)は坏部分である。(43)は丸味をもつが、他は脚部より平坦部をもち、上半部は直線的に大きく広がる。(46)～(51)は脚部であるが、(49)はあるいは器台の可能性もある。(47)は円筒状の脚をもつ。(48)は内外面にハケ目を残している。(49)～(51)は、内外面ともにナデているが、脚内部のみはヘラ削りを施す。

⑤須恵器

坏身（第８図１～５）

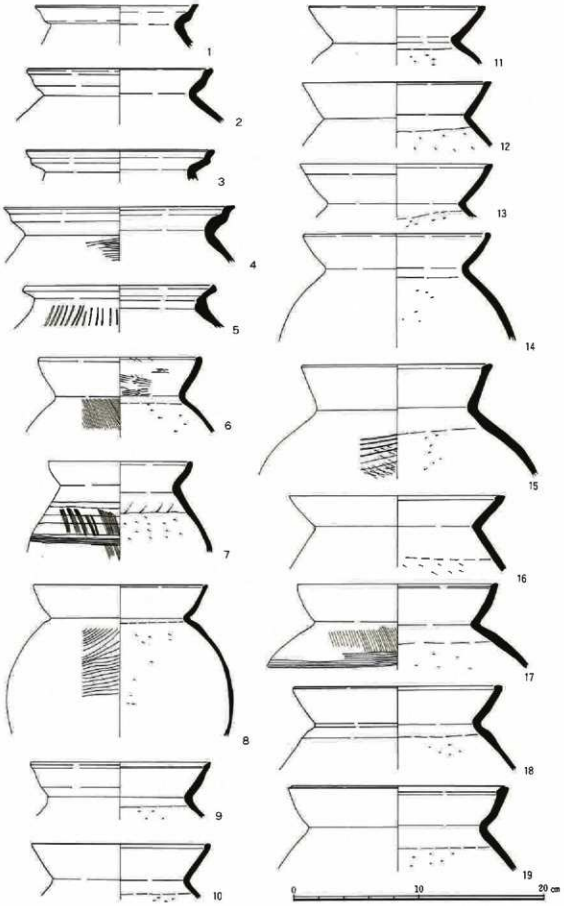
(1)～(2)は受け部からのたちあがりが高く、口径は(1)が12.7cm、(2)が12cm、器高が(1)は4.5cmを測り、底部寸にヘラ削りを施す。陶邑古窯址群ＭＴ15に相当するものであろう。(3)は受け部より内傾する短いたちあがりを有している。口径11.6cm、器高3.7cmを測る。外面は底部が平坦となり、その平坦部分のみヘラ削りを施している。受け部に重ね焼きの痕跡が残る。ＴＫ43に相当するものであろう。(4)～(5)は(3)と同じように短く内傾するたちあがりを有しているが、口径はいずれも14cmを測り、器高は(4)が５.2cmを測る。体部は丸味をもち、シャープさに欠ける。いずれも外面体部全面に自然釉がかかる。ＴＫ43もしくはＴＫ209に相当するものであろう。

坏蓋（第８図６～７）

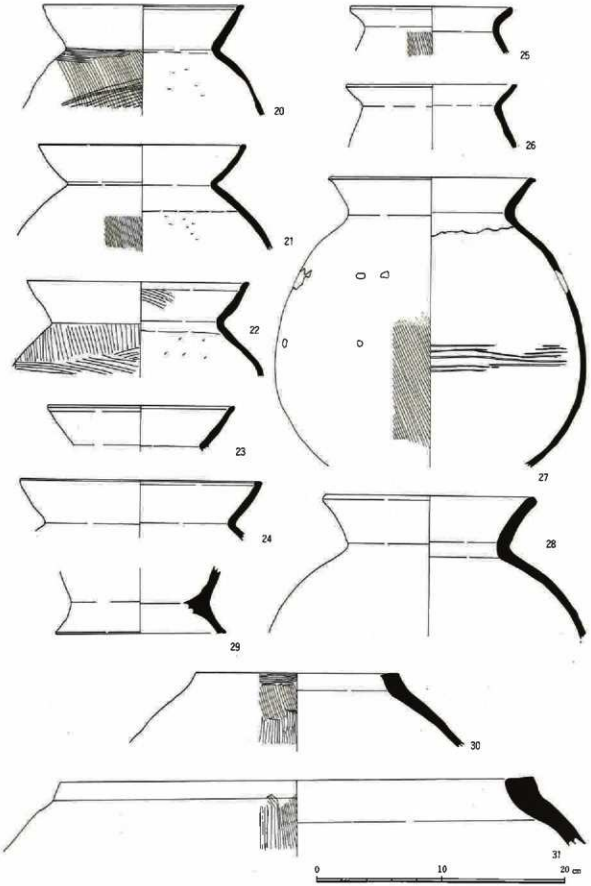
(6)～(7)はいずれも天井部と体部との稜はまだ明瞭に認められるが天井部自体は丸味をもっている。ＭＴ15に相当するものであろう。

広口壺（第８図８）

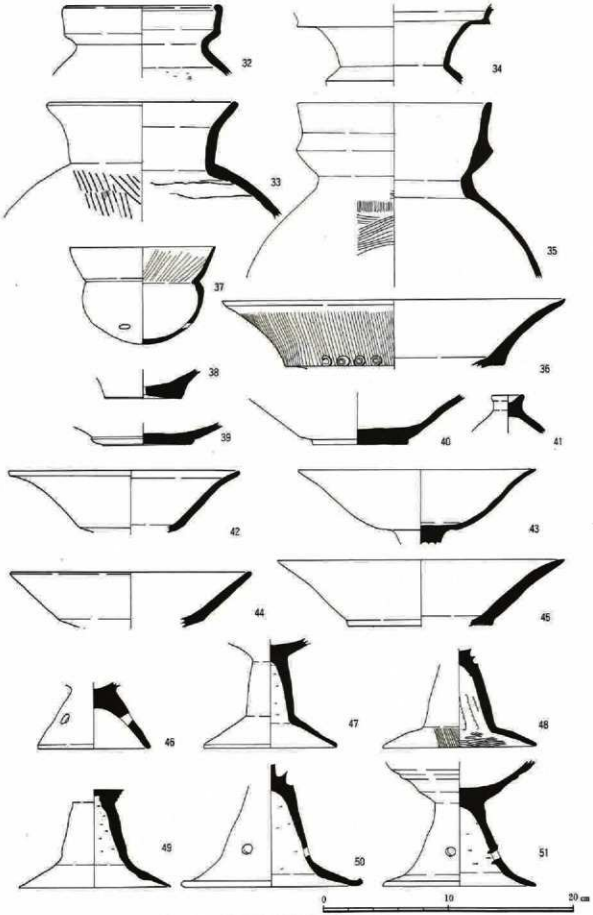
(8)は広口壺の口縁部と考えられるもので、朝顔形に外反し、端部は屈曲して直にたちあがっている。口頸部文様帯は２条の沈線を２段に施し、その両間に波状文を施している。



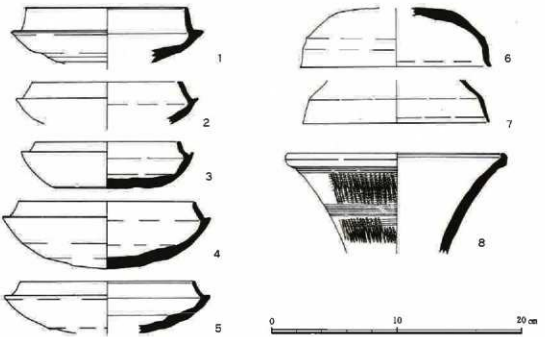
第５図　下層出土遺物（土師器）実測図



第6図　下層出土遺物(土師器)実測図



第7図　下層出土遺物(土師器)実測図



第８図　下層出土遺物(須恵器)実測図

(2)上層出土の遺物

上層からは奈良時代後半に位置付けられる土師器皿、坏、高坏、甕と須恵器坏、坏蓋、皿、高坏、甕などが出土している。器種分類は、『平城宮発掘調査報告Ⅶ』(奈良国立文化財研究所学報第26冊 1976)の平城宮土器器種表によっておこなった。また下層からの混入ではないかと見られる砥石、須恵器甕などもあるが、ここでは上層遺物として報告しておく。なおこれら以外では土製品としての土錘、瓦、平安時代以降と考えられる土器類および曲物等の木製品も出土しておりあわせて上層遺物として報告する。

土器類

ⓐ土師器

坏A (第９図１)

(1)は高台を有さない坏で、口径15.3cm、器高４cmを測る。底部はやや不安定な平底となる。口縁端部はつまみ出しによって外反する。

坏B (第９図２)

高台を有する(2)は、高くシャープな高台をもつ。底部に黒斑が認められる。

皿A (第９図３～５)

高台を有さない皿Aは、(3)が口径16cm、器高2.7cm、(4)が口径17cm、器高1.8cm、(5)が口径17.5cm、器高2.3cmを測る。(3)･(4)の口縁端部は平担面を有するが(5)はやや端部が肥厚する。３点ともに内面にヘラ書暗文が施されている。

甕（第９図６～８）

(6)～(8)はいずれも小型の甕で、(7)は体部にハケ目を施す。(8)は長胴甕で体部内外面ともにハケ目を施している。

ⓑ須恵器

坏Ａ（第10図１～24）

高台を有さない坏Ａは最も多く出土している。(1)は器高が2.5cmと低い。(2)～(9)は底部の調整が粗く、安定性を欠いている。口径に比べて器高は低い。(9)は良好な焼成により青灰色を呈するが、他は焼成が甘く、黄灰色を呈している。(10)～(24)は、底部が平底で安定している。このタイプは先のものに比べて器高が高い。また焼成は良好で、色調は青灰色を呈しており、(1)～(9)と対称的である。

(11)の底部には墨書が認められるが判読は不明である。また(17)・(21)・(23)・(24)の外面には自然釉がかかる。

坏Ｂ（第10図・第11図）

高台を有する坏Ｂである。(25)～(29)は、高台より斜上方にすぐ体部へと続き、大きく開いて口縁端部に至っている。(28)がやや小型であるが他はほぼ均一的な法量を示す。(30)～(34)は高台から体部に至る間に平坦面をもって斜上方にたちあがっている。(30)は前者と同様の法量を示すが、(32)～(33)は口径に比べて器高が低い。(35)～(44)は、高台より丸味をもって体部が斜上方に至るものである。(38)は、器高が高いが、他は口径に比べて器高が低い。

坏Ｂ蓋（第11図45～49）

(45)～(49)はつまみのつく蓋Ｂで、丸味をもつ天井部から、ゆるやかに口縁部に至り、稜線もほとんど明確でない。器高は低い。ただし(49)の形状は笠形となり、器高も3.5cmを測る。

皿Ａ（第11図50）

(50)は高台を有さない皿で、口径18.5cm、器高2.1cmを測る。

皿Ｂ（第11図51）

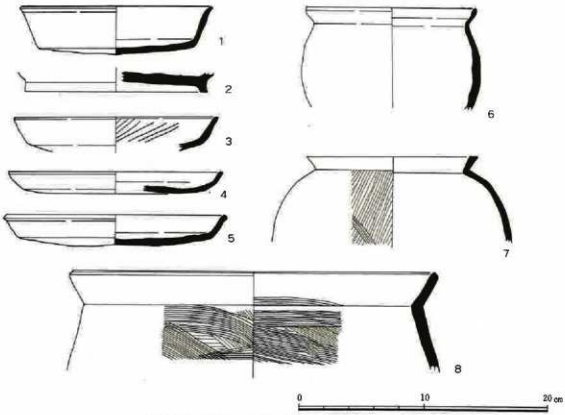
(51)は高台を有する皿で、口径23cm、器高４cmを測る。２～５㎜の石粒を多く含む、粗い胎土で、焼成も非常に甘い。

壺（第11図52～58）

(52)～(54)は小型の壺である。(52)は高台を有するもので、口縁部に低いたちあがり部をもっている。薬壺であろう。(53)・(54)は無頸の壺である。(55)・(56)は壺の口縁部と考えられ、(56)の口縁端部は垂直にたちあがる。なおこの(56)は内外面ともに自然釉がかかる。(57)・(58)はいずれも長頸壺の頸部で、自然釉がかかっている。

甕（第12図・第13図）

(59)は、甕Ｃに担当するものと考えられるが肩部でふくらみをもたず、鉢の体部のようになっている。外面体部は横位のハケ目が施され、内面体部は同心円文をナデ消している。(60)は直にたちあがる口縁を有する甕で、外面タタキを施し、内面は同心円文をナデ消している。外面には自然釉がかかっている。(61)は口径25cm、器高45cmを測る大型の甕で、外面全体にタタキを施している。内面は底部付近は同心円



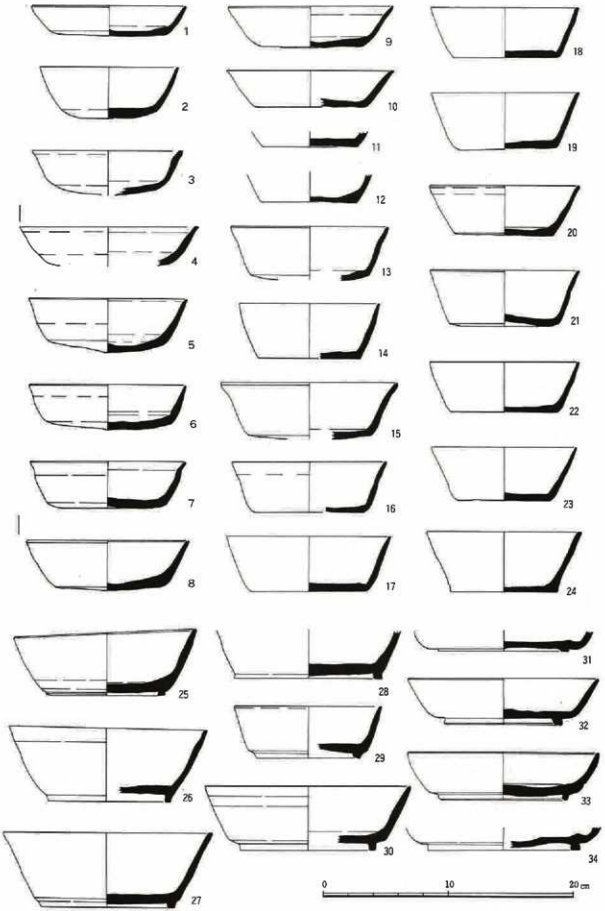
第９図　上層出土遺物(土師器)実測図

文を残しているが、体部はこの同心円文をナデ消している。なお底部には別の須恵器が焼成時に貼りついてしまっている。そしてこの甕自身も焼成時に弯曲しており、底部は非常にいびつになってしまっている。(62)は口径17cm、器高31cmを測る甕で外面はタタキを施し、内面は同心円文となる。(63)は底部平底の甕で、口径17cm、器高32cmを測る。外面はタタキを施しているが、底部付近では、ヘラ削りとなる。内面は全体にナデを施している。この(63)は器形、手法より他の遺物と異なり、時代が新しいのではないかと考えられる。

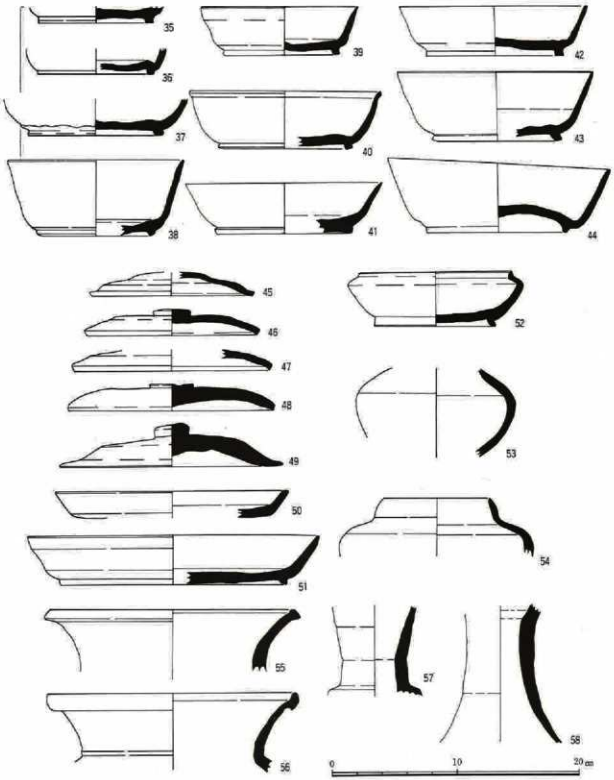
(64)～(67)は甕の体部と考えられるものであるが、(64)は外面体部のタタキをナデており、内面も同様にタタキの後、ナデ仕上げを施しているようで、わずかにタタキの痕跡が認められる。(65)は外面全体に粗いタタキを施している。内面には同心円文のタタキが認められるが、ナデ仕上げを施したものらしく、器面は平滑になっている。(64)・(67)に比べて器壁は非常に薄く５㎜を測る。(66)も同じく外面は粗いタタキが施されているが、内面は平滑となる。(67)は、外面タタキの後、ハケによる調整が認められる。内面はナデによって平滑となっている。焼成は甘い。これら４点はいずれも時期が不明であるが、あるいは、(63)の甕と同時期のものであろうか。

ⓒ灰釉（第14図１～２）

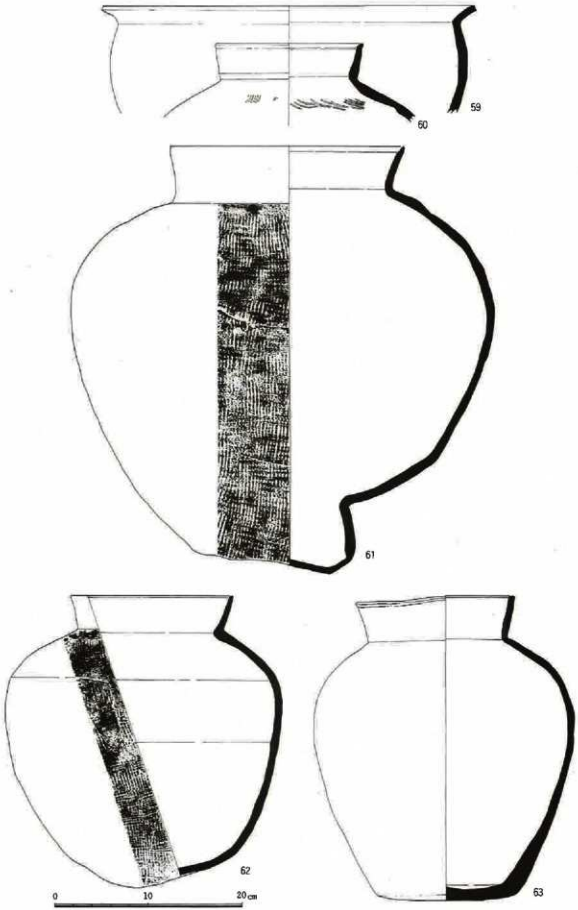
(1)は塊の底部と考えられる。平底ではあるが、高台状にしており、底面には糸切り痕を残す。(2)は、灰釉の皿で、外方へふんばる低い高台を付け、糸切り痕を残す。



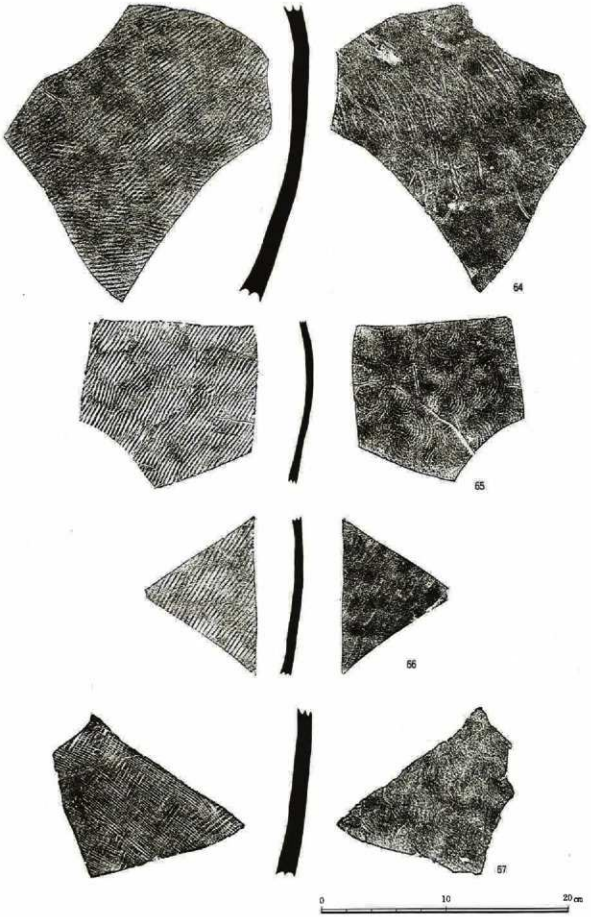
第10図　上層出土遺物(須恵器)実測図



第11図　上層出土遺物(須恵器)実測図



第12図　上層出土遺物(須恵器)実測図



第13図　上層出土遺物(須恵器)実測図

土製品

土錘（第14図３～７）

土錘は円柱状のもの(3)～(5)と、球状のもの(6)～(7)がある。いずれも土師質である。

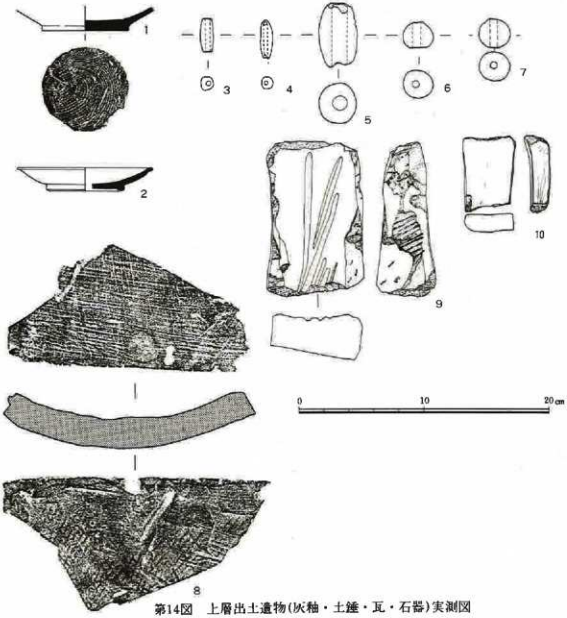
瓦（第14図８）

瓦は一点のみ出土している。(8)は焼成の甘い須恵質の平瓦片で、凸面は、タタキの痕跡が認められ、内面は布目を残す。

石器

砥石（第14図９～10）

(9)は砂岩質の砥石で、３面を使用している。このうちの１面には６条の磨痕の溝が残っている。(10)は小型のもので石材は不明。いずれも下層からの混入と考えられ、古墳時代のものと思われる。



第14図　上層出土遺物(灰釉・土錘・瓦・石器)実測図

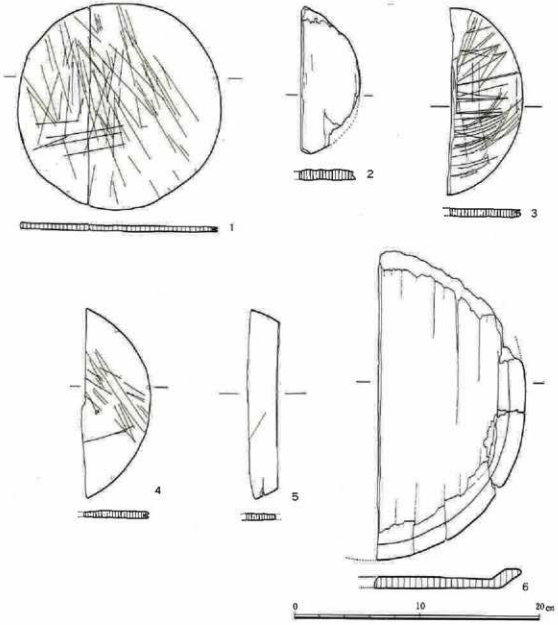
木製品

曲物（第15図１～５）

(1)～(5)はいずれも、曲物の底部である。(1)は完形で、直径16.2cm、厚さ0.5cmを測る。側縁には、4ヶ所に釘穴が認められる。また表面には無数の刃物痕が残る。(2)～(5)も側縁に釘穴が穿たれており、(3)・(4)は(1)同様、刃物痕が多く残っている。

皿（第15図６）

(6)は直径24cmほどになると思われる皿で、深さは、約１cmと浅く、口縁部よりゆるやかなカーブをもって内底部に至る。



第15図　上層出土遺物(木製品)実測図

第Ⅳ章　調査のまとめ

今回の調査は当初、中多良に所在する、下定使、薗華寺、立花の３遺跡の調査であったが、排水路部分のみの調査であったため、北端部と南端部では遺構・遺物ともに一切認められなかった。また中央部の３～16トレンチでも、集落に近い部分では遺物は出土せず、西側に向って遺跡は広がることが判明した。この３－16トレンチは薗華寺遺跡に相当するわけであるが、明確に寺院に関連する遺物の出土は瓦片一点をのぞくと皆無であった。

しかし、上下２層にわたる遺物包含層の確認の意義は大きい。遺跡周辺では以前より遺物が表土面にて採集されており、今回は遺構面までかなり浅いと考えられていたが、下層は現地表面下1.5～2.0m（標高84m）であり、周辺の入江内湖関連遺跡と同様であった。また排水路という非常に限定された範囲であったため、この遺物を包含する層自体が、遺構の埋土であるのか、あるいは単なる遺物包含層であるのかは確認できなかった。

また上層では７トレンチの東端部分にのみ遺物が集中していたが、遺構を検出することはできなかった。字〝円ヶ寺〟自体は排水路部分からは、はずれており、調査対象とはならなかったが、以前より水田耕作に際して遺物の出土があったということであり、今後周辺地の調査が一層望まれる。

このように南、北は砂礫層であり、自然流路もしくは天野川の氾濫源と見られ、これに囲まれた３－16トレンチ地区がさらに西方に向って中多良集落より半島状に伸びていたのではないかと考えられる。

第16図　調査参加者スナップ

第Ⅴ章　付　載

～筑摩佃遺跡発見の遺物について～

(1)発見に至る経過

昭和61年10月11日、米原町入江在住の佐藤宗男氏と近江町教育委員会技師中川通士氏より、米原町中多良地先ほ場整備工区内で、縄文式土器を含む上器片が出土している由の通報を受けた、米原町教育委員会では、早速現地におもむいた。現地では地下1.5m程の掘り方内に、長さ14m、幅８m、深さ２mのコンクリート水漕を建設中であった。排出土を観察すると土器片が散乱していた。町教育委員会では今回の中多良工区内でこのような掘削は知らされていなかったので、県事務所から提出された図面を調べ

第17図　筑摩佃遺跡遺物採集地点位置図

たところ、一昨年度より実施されている、天の川西部南地区朝妻筑摩第２工区のほ場整備区内の工事であることがわかった。この工区内は従来周知の遺跡が存在していなかったため、事前に発掘調査は実施しておらず今回のように工事中に遺物が発見されたのである。

位置確認後、県教育委員会文化財保護課へ連絡し、長浜県事務所土地改良課より遺跡発見届の提出を依頼した。新たに発見されたこの遺跡は小字名より「筑摩佃遺跡」とした。

(2)層序

層序はすでにコンクリート水漕が出来ており、明確に知ることはできなかった。わずかに残っていた壁面を観察すると、表土（耕土・床土）、粘土、黒色粘土となっており、排出土中の土器片は、このうち黒色粘土中に原位置を保っていた。この黒色粘土は薗華寺遺跡下層の黒色粘土に対応するものではないかと考えられる。標高および現地表面からの深さもほぼ同様である。そうなれば中多良集落と朝妻筑摩にはさまれた水田地帯の地表下1.5～2.0メートル地点は縄文時代から平安時代に至る一大複合遺跡となる可能性がある。

(3)出土遺物（第18図）

さて排出土中より採集した土器片はコンテナ約１箱分であったが、大きく縄文式土器、弥生式土器、古式土師器、須恵器であった。このうち大半は縄文式土器である。また細片がほとんどであり、器形復元できるものはなかった。ここでは縄文式土器を中心に報告しておきたい。

縄文式土器

①早期の土器

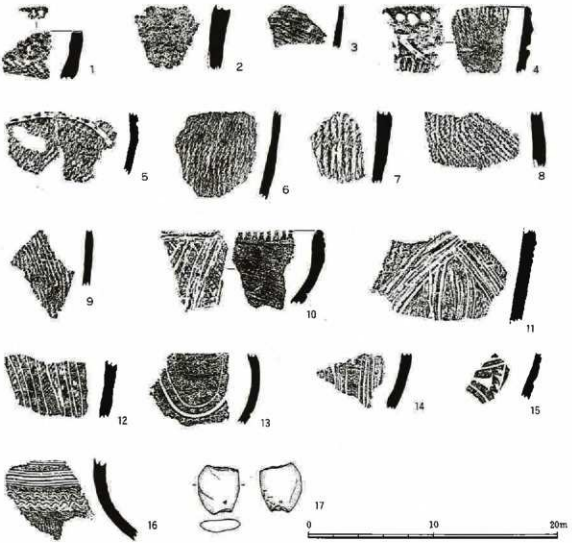
排出土中採集遺物の中で最も古いものは縄文時代早期末葉に位置付けできる土器である。

(1)は竹管による押し引き文が施されており、やや屈曲を有する器形である。口縁端部には、刻目文を施している。小片のため、全体の施文が不明であるが、茅山下層式に属するのではないかと見られる。(2)は無文の条痕文系土器で、内外面ともに貝殻による条痕文が認められる。胎土中に多量の繊維が含まれている。器高の厚さは1.2cmを測る。八ッ崎Ⅰ式～柏畑式に属するものであろう。(3)は器壁５㎜と薄いもので、胎土中に角閃石を多量に含む。外面に施文は認められず、内面は条痕文となる。早期最末期、石山式以降のもので、粟津湖底遺跡出土早期末～前期初頭土器に類似する。

②中期の土器

(4)～(9)は、船元Ⅱ式に属する中期の土器で器面全体を粗い撚りの縄文を施したもので、(4)は口縁直下の突帯上にアルカ属貝の押圧痕を伴い、波状の大きな骨状爪形文を施している。内面は口縁端部より約３cmにわたり、縄文が施されている。(5)はやはり、波状になると考えられる大きな骨状の押し引き文が施されている。(4)と同一個体か。

(10)～(12)は、船元Ⅲ式に属する中期の土器である。(10)は内弯する口縁部で端部内面に刻目を施す。外面は縄文地に縦位の突帯を付し、さらに突帯に平行する竹管文が施されている。(11)も粗い縄文と突帯によって文様を構成し、突帯に平行して竹管による沈線文が数条にわたり施され、この沈線は突帯上にもお



第18図　筑摩佃遺跡採集遺物実測図

よんでいる。典型的な船元Ⅲ式土器である。⑿は同じ船元Ⅲ式土器ではあるが、突帯を付さず、粗い撚りの縄文地に竹管文による沈線のみの施文となる。里木貝塚報告における船元Ⅲ式土器B類に相当する。

⒀～⒁は同じく中期の土器と考えられる。⒀はキャリパー状口縁の鉢のちょうど内弯する口縁部で無文地に、平行する２条の竹管文を半円に施している。⒁は無文地に条線文状の竹管文を縦位に施している。いずれも型式は明確でないが、⒀は器形、施文より船元Ⅳ式併行ではないかと考えられ、⒁は里木貝塚でいう船元Ⅲ式土器C類に相当するものと考えられる。

③晩期の土器

⒆はクルス状の三叉彫刻を二重に施文したもので、北陸地方晩期初頭の八日市新保式の影響を受けたものである。

弥生式土器

⑯は壷の頸部で梅描横線文と波状文が施されている。内面は刷毛目による調整痕が明瞭に認められる。弥生時代中期の土器と考えられる。

石器

⑰は両端部を打ち欠いた石錘である。長さ3.9cm、幅３cm、厚さ0.9cmを測り、重さは　gである。円礫に加打による加工をおこなっている。おそらく縄文時代に属するものであろう。

(4)まとめ

今回の筑摩佃遺跡の発見は、工事中の不時発見ではあったが、意義のあるものであった。その遺物の大半が縄文式土器であり、最も古いものは早期末葉の条痕文系土器であることが判明した。出土地の南方には入江内湖があり、その南岸には押型文土器、条痕文系土器が多量に出土した磯山城遺跡が位置している。このことから、入江内湖辺周には縄文時代早期より、集落が点在していたことは確実である。工事中の排出土という条件のため、前期および後期の土器片は採集しえなかったが、磯山城遺跡同様晩期まで継続していたと思われる。

現地は標高85.92mであり、黒色粘土層が－1.5～2.0mであったとすれば、縄文時代の標高は83.92～84.42m付近となり、琵琶湖岸に展開する低湿地であったと考えられよう。

近年琵琶湖周辺において縄文時代の遺物の出土が増加しており、付近が狩猟採集経済の縄文人達にとって、非常に住みやすい環境であったことが理解できよう。従来知られている遺跡と近年の調査成果を別図別表に掲げておいたので参考にして頂くとともに、今後、本遺跡周辺の開発工事等に充分注意することを念頭において、まとめとしたい。

なお、出土した縄文式土器に関して、奈良大学泉拓良氏より、有益な御教示を頂いた他、周辺遺跡一覧作成にあたっては、財滋賀県文化財保護協会田中勝弘、同細川修平、近江町教育委員会中川通士、同調査員高居芳美、佐藤宗男の各氏より御教示を得た。記して感謝する次第である。

第19図　坂出郡南西部地区の縄文式土器出土遺跡

	遺跡名	所在地	時期	出土遺物	備考
A	筑摩佃遺跡	坂田郡米原町朝妻筑摩	早・中・晩	土器、石鏃	
1	法勝寺遺跡	坂田郡近江町高溝	早	高山寺式土器	田中勝弘「湖北地方の縄文時代遺跡」(『滋賀県文化財だより』No19. 1987)
2	高溝大井・ニゲタ遺跡	坂田郡近江町高溝	前・中・後	土器、石器	昭和61年度県営ほ場整備事業に伴い近江町教育委員会が調査を実施。
3	入江内湖周辺遺跡	坂田郡米原町下多良	後・晩	土器、石鏃、石錐	米原町教育委員会『入江内湖周辺遺跡発掘調査説明会資料』1986
4	入江内湖遺跡	坂田郡米原町入江	早～晩(?)	土器、石斧、石棒、凹石、	磯崎文五郎氏他採集資料 現在、琵琶湖博物資料館が保管、展示
5	磯湖底遺跡	坂田郡米原町磯	後・晩	土器	昭和61年に滋賀県文化財保護協会が潜水調査により確認
6	磯山城遺跡	坂田郡米原町磯	早～晩	土器、石鏃、石錐、磨り石他	中井均他「磯山城遺跡－琵琶湖周辺縄文早－晩期遺跡の調査－」米原町教育委員会 1986
7	松原沖遺跡	彦根市松原町	早	押型文土器	小島正夫他「矢倉・磯崎両遺跡について」(『近江』第3号 近江考古学研究会 1973)
8	松原内湖遺跡	彦根市松原町	前～晩	土器、石器、木製品	昭和60年度より、滋賀県文化財保護協会が継続調査中
9	能登瀬	坂田郡近江町野登瀬	早	条痕文土器	高原芳美氏表採資料

第1表　坂田郡南西地区の縄文式土器出土遺跡一覧表

図　版

(1) 調査作業風景

(2) 第4トレンチ全景

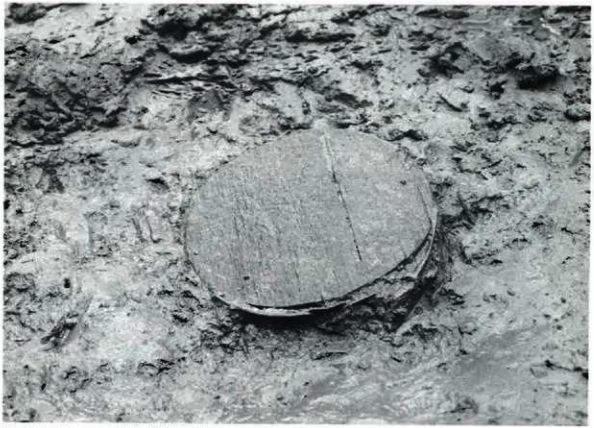
(1) 第4トレンチ土層断面

(2) 第6トレンチド層遺物出土状態

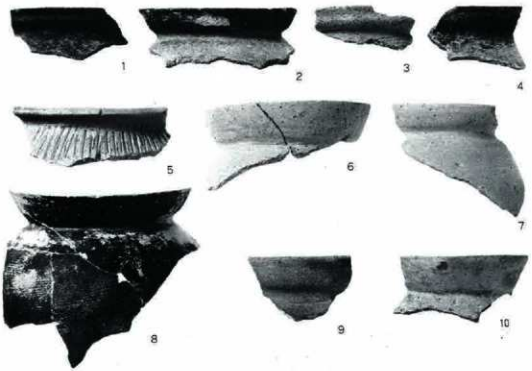
(1) 第7トレンチ上層遺物出土状態

(2) 第7トレンチ下層遺物出土状態

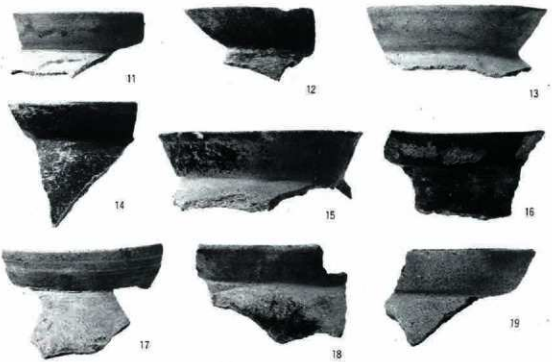
(1) 第7トレンチ上層獣骨出土状態



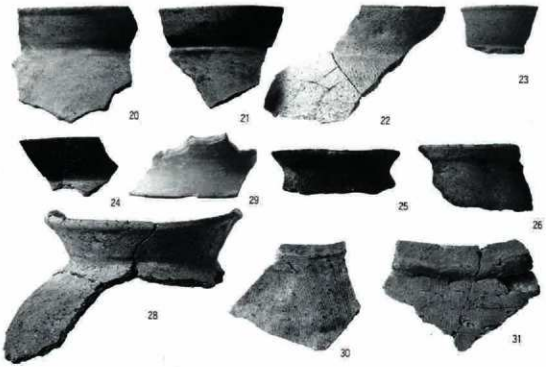
(2) 第6トレンチ上層木器出土状態



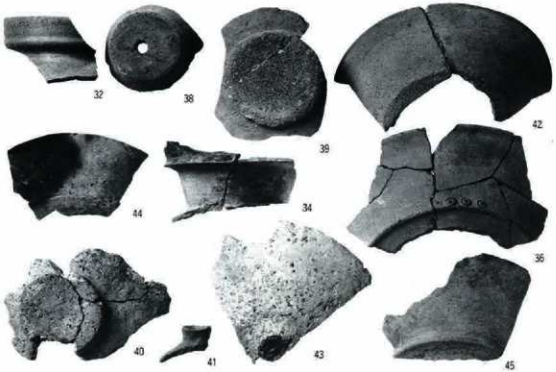
(1) 下層出土土師器



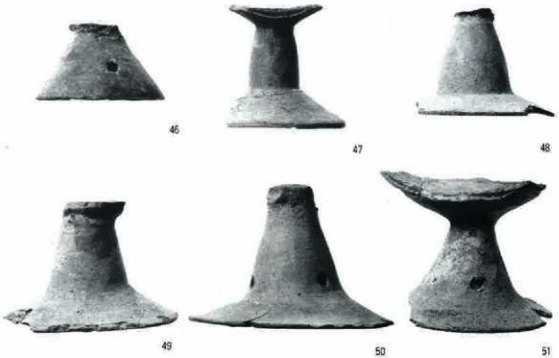
(2) 下層出土土師器



(1) 下層出土土師器



(2) 下層出土土師器



(1) 下層出土土師器

(2)下層出土土師器

(3) 下層出土土師器

35

37

3

5

1

2

4

6

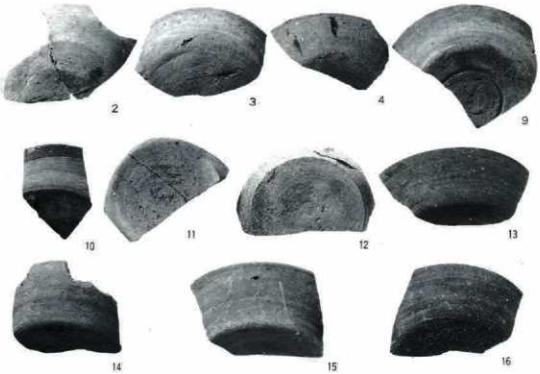
7

8

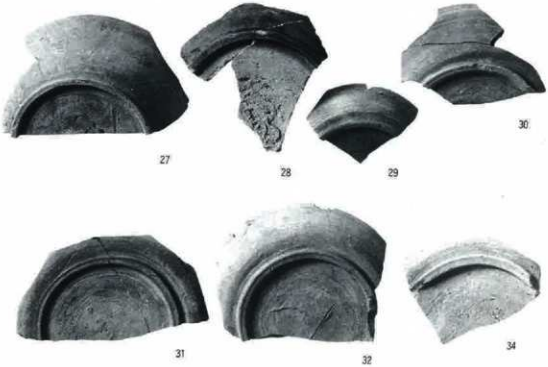
下層出土土師器・須恵器

上層出土土師器・須恵器

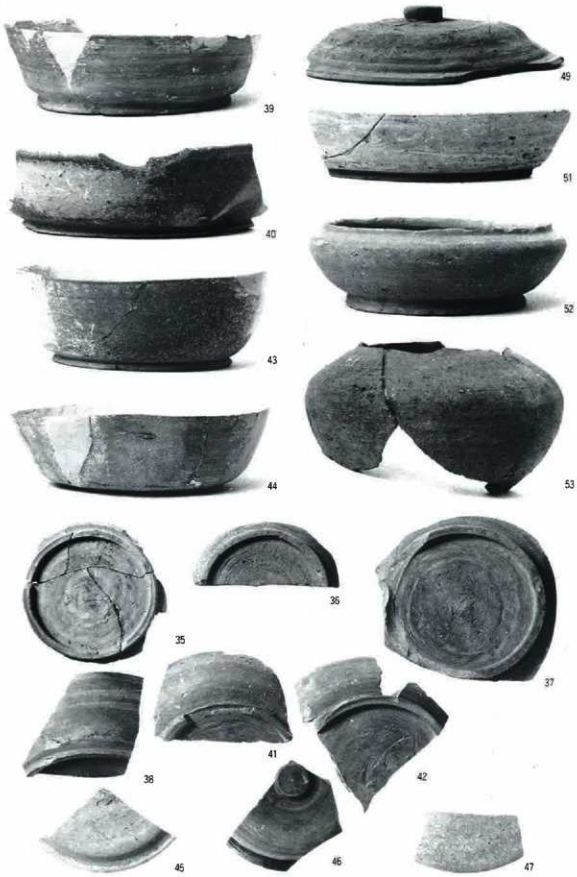
上層出土須恵器



(1) 上層出土須恵器



(2) 上層出土須恵器



上層出土須恵器

上層出土須恵器

62

63

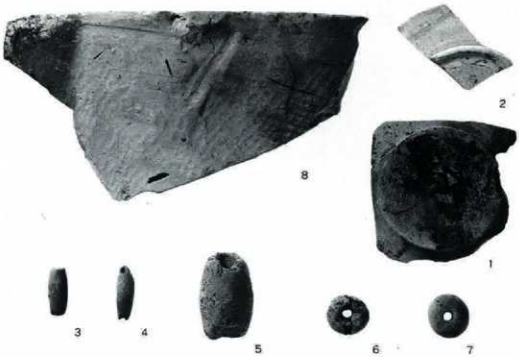
64

65

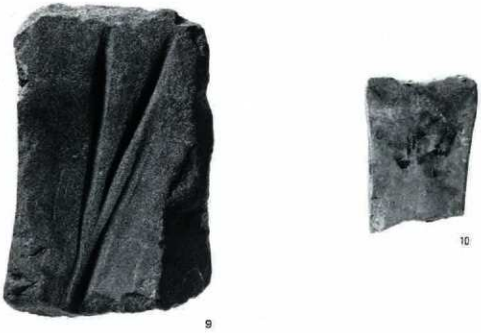
66

67

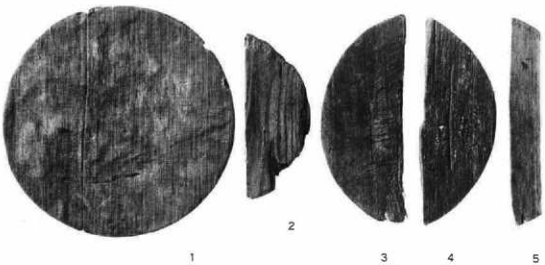
上層出土須恵器



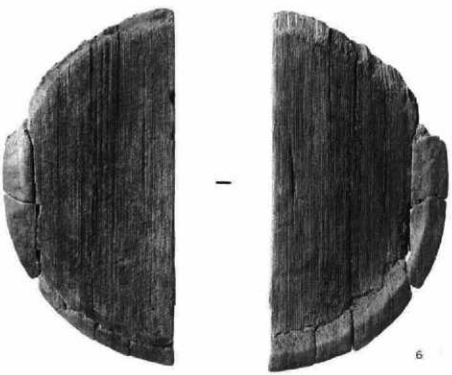
(1) 瓦・灰釉・土錘



(2) 砥石

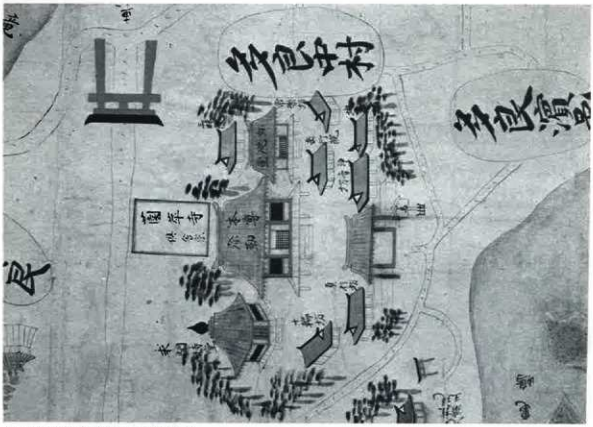


(1) 曲物



(2) 木皿

(1) 筑摩社並七ヶ寺之絵図(筑摩神社蔵)



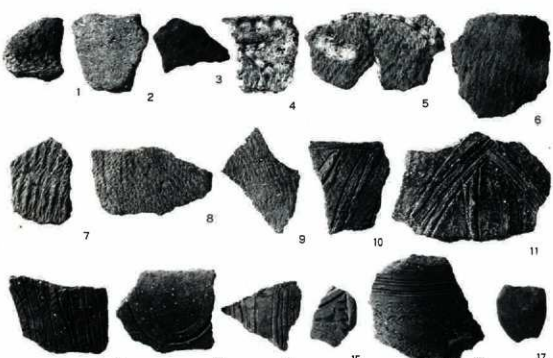
(2) 同上拡大部分(中多良開華寺)

(1) 遺跡近景

(2) 縄文式土器散布状況

図版十九　付載　筑摩個遺跡

(1) 縄文式土器散布状況



(2) 出土遺物

米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅶ

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

昭和62年3月25日　印刷
昭和62年3月31日　発行

発行　米原町教育委員会
滋賀県坂田郡米原町下多良3丁目3番地

印刷　立木印刷
滋賀県坂田郡米原町醒井478－1